

2月からフィリピの手紙の説教を始めたが、並行してその著者であるパウロの生涯も学んでいきたい。それによって彼の手紙の内容が、更によく理解することになると思うからである。

ある人は、「パウロの手紙は電話をしている人の片方の人の話を聞いているようだ」と書いているが、パウロの生涯を知ると、それが大いに改善されると思われる。

1/10の説教「マケドニアからの招き」では、フィリピ伝道のそもそもの始まりであるアジア州の港町トロアスで見た幻(使徒16:9)、と文章の主語が「私たち」(10節)に変わったことから、使徒言行録の著者ルカがパウロの伝道チームに参加したことを意味する事を見た。

I. リディアとその家族の入信

フィリピの町に入ったパウロたちは、安息日に祈りの場所がある川岸に行き、そこに集まっていた婦人たちに話をした。

その中のティアテラ市出身で、紫布の商人のリディアという婦人が、パウロの話を聞いて心を開いて、イエスを信じて家族共に洗礼を受けた。彼らがフィリピ教会の基礎となった信徒の第一号であった。

パウロのフィリピ宣教は順調な滑り出しであった。しかし、そうは問屋が卸さなかった。伝道チームの前に試練が訪れた。

II. 占いの霊に取り憑かれた女奴隷の救い

パウロたちの前に現れたのが、占いの霊に取り憑かれた女奴隷であった。彼女は占いによって主人に多くの利益を齎していた。彼女はパウロの伝道の邪魔をしたので、パウロは彼女から占いの霊を追い出して彼女を占いの霊の束縛から解放した(18節)。

一方、女奴隷の主人はそれによって、商売の邪魔をされて、儲けることができなくなると市当局に訴えた。そこでパウロとシラスの二人は鞭打たれ、足枷をはめられ牢に入れられてしまった(23節)。

III. 看守とその家族の救い

その夜、パウロとシラスの二人は痛みに耐えて、神を賛美し、祈っていた(25節)。それを、他の囚人たちも皆聞いていた。

すると突如、大地震が起こり、牢の扉が開き、囚人の鎖も外れてしまった。牢の看守はてっきり囚人は逃げてしまったと思い責任を取って自殺しようとした。それはもし、囚人を逃がしたら看守はその責任を負わせられて、殺されることになっていたからである。

しかし、囚人は誰も逃げず、パウロの説得の言葉である「主イエスを信じなさい」(31節)に従って、看守はイエスを信じ、家族皆が洗礼を受けた。

この様にして、パウロのフィリピ伝道は、困難や試練にも見舞われたが、徐々に入信者や受洗者が起こされて、教会の基礎が固められていったのである。これがフィリピ教会の「福音の前進」であった。(フィリピ1:12)

